

磯田道史の

古今
なちこち

摩子・種村山童

京都をぶらぶらして聚雲堂という古書画屋に入り、何か面白いものはないかとみていたら「木村重成黒髪に今際としめし空薫は 千代の香りと成りにけるかな 清綱」と書かれた短冊をみつけた。薩摩藩士・元老院議員・子爵黒田清綱という男がいる。洋画家黒田清輝の養父かつ伯父。筆跡からみて彼の自筆和歌短冊のように思われた。

「木村重成」は1615年の大坂の夏の陣で名を残した豊臣方の部将。絶世の美青年。討死しても見苦しくないよう自分の兜と黒髪に「空

「信繁」も加わり 兜に香

薫」という方法で香りを焚きしめて出陣。首をとられた。首実検の時、美しい彼の生首からは香薫が漂い、後世の語り草となった。短冊の和歌はそれを詠んだものらしい。

疑問がおきた。兜に香の薫りを焚きしめ、においをうつす、とは如何なることか。香の空薫を実験してみたくなった。今年は大河ドラマで真田丸をやっている。そうだ。真田丸の主役・真田信繁（幸村）をやっている堺雅人さんをよんで一緒に、豊臣方の部将の兜に香を焚きしめる実験をやろう。木村重成は真田丸の戦いでも活躍している。役作りにいい。早速、志野流香道の若宗匠・蜂谷宗苳さんに連絡をとってみた。「あのう。香を兜に空薫で焚きしめる実験をやりたいのですが……」。駄目でもととの頼みである。

奇跡がおきた。「やりましょう」。蜂谷さんはそういつてくれた。「東

京の麻布十番に香雅堂という香木店があります。その店主にいつておきます」。空薫は高価な香をたくさん焚くから香木店の協力が必要なようであった。堺雅人さんに連絡すると、好奇心が強く役作りに熱心な彼から即座に「行くー」と返事がきた。信繁の兄信之子孫真田家14代幸俊さんも来ることになった。

大河ドラマの収録は平日である。実験をやるなら土曜がいい。蜂谷さん

と私は土曜に香席をもつけることにした。丁度、私が原作の映画「殿、利息でござる」が完成したから、堺さんとその話もしたかった。本当は堺さんにもこの映画に出てもらって、スケート選手の羽生結弦さんとの夢の競演を実現してもらいたかったのだが、名優は忙しい。大河ドラマと重なって実現できなかった。

その日がきた。兜は私が浜松の友人に借りた。真田信繁の鹿角の兜の複製である。蜂谷若宗匠、堺雅人さん、それに私と志野流香道のお弟子さんたちが集まった。皆、かたずをのんで実験を見守った。香雅堂さんがその兜の下に小さな香炉をおい

た。伽羅の香木を兜の下から焚き、香気をうつすという。高価な伽羅に火がつけられると、白い香煙が猛烈にあがった。座敷中に伽羅の香りが広がる。しかし、香木に直接火をつけ一気に焚いたから、香気がでなく焦げくさいにおいが混じっている。香木を「焚いている」ではなく、香木が「燃えている」感じである。燃えきったところで兜を裏返して皆で、においをみた。

残念。こげくさい。たしかに伽羅の香りもあるが、割り箸を燃やしたようなこげ臭さがある。「香気は透明。白い煙が出る」と焦げたにおいになる。香雅堂さんが教えてくれた。実験は失敗だったが、「伽羅などの香木でなくむしろ練り香などで時間をかけてゆっくり香気を兜にうつし、いったほうがよいのではないか」という結論になった。

そのあとで香の聞きあて競べをやったが、20年以上、香道をやっている人々を押しつけて一番になったのは堺雅人さん。彼は初めて香を聞いたという。一芸の達人はすごいものだと思った。（日本史家）

*「震災5年 愚歌を求めて」休みました。

画・村上 豊

